



## 巻頭インタビュー

米ロサンゼルス市長

# エリック・ガルセッティ

Eric Garcetti 1993年コロンビア大学卒業、同大学院修了。ローズ奨学生としてオックスフォード大学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学。南カリフォルニア大学客員研究員、オクスデンタル大学助教などを経て、2001年ロサンゼルス市議会議員初当選。2006～12年市議会議長を務めた。2013年より現職。現在2期目。民主党所属。

## 日米貿易交渉は二国間FTAも有りうべし

聞き手・編集部

——日本では米国次期大統領選挙への関心が高く、ガルセッティ市長が出馬の意欲を見せていることは、注目されています。

ガルセッティ 現在は出馬を「検討中」の段階で、正式な表明ではありません。ただ、私が今のアメリカを見て、居たたまれない気持ちになっていることは事実です。対外的な威信は揺らぎ、国内的にも問題がいろいろと生じています。そもそも、リーダーが毎日のように言うことがくるる変わるのでは、将来に向けた計画も立てられないし、世界を導くこともできません。

ただ、私が大統領選の出馬を考えるようになったのは、それだけが理由ではありません。私は、現代は世界中の人々にとって不安の絶えない時代だと考えています。民族に基づく分裂、気候変動や大量の移民、終わることのない紛争などによる不安に、私たちは日々直面しています。ところが、世界のリーダーでこうした不安に対して答えを出さうとしている人が見当たらない。自分が皆に貢献できるかどうかを見極めた上で、出馬を判断するつもりですが、もし大統領になれば、米国の潜在力を再びフルに発揮できるようにしたい。それは世界中の人々、そして特にわれわれ米国人にとって重要だと考えています。

## 多様性がロサンゼルスを豊かにした

——トランプ大統領の政策について、どのような印象をお持ちですか。

ガルセッティ 米国は建国以来、理念を追求する国として存在してきました。もちろん歴史をふり返れば、「すべての人間は生まれながらにして平等」という独立宣言の「人間」に女性が含まれていませんし、奴隷制も存在しました。それでも、米国が理想を実現するために努力し、核となる哲学を抱いていたことは事実だと思います。

私の見るところ、トランプ大統領の核となる哲学は、混沌とリアル・ポリテイクだけです。私は、大統領が「民主主義を信じている」と発言したことを聞いたことがありません。トランプ大統領が自由主義的な国際秩序に疑いを持っていることは明らかですし、民主的な政体も、国際協力も信じていません。ところが、この三つこそが、現下の世界秩序の礎石なのです。

世界がどれほど脆弱かを、私たちは忘れてしまいがちです。今の世界秩序は私が生まれる前から存在し、それを支える価値観も子ども時代から聞き馴染んでいます。しかし、米国のリーダーシップなくしては、この秩序が崩壊するの

は、あつという間のこととなるでしょう。

——トランプ大統領の就任以来、米国では人種・民族をめぐる政治対立は強まっているようです。

**ガルセッティ** 大統領が「移民はひどい」と言うのに対して、「移民は素晴らしい」と反論しても、ちがが明きません。何がよい結果をもたらすのか、明確に伝えることが大事です。「親から子どもを取り上げることは、私たち社会にとってよくない」「ロサンゼルスの新しいビジネスの六一％は移民が始めたものだ。だからロサンゼルスの経済は強いのだ」と答えなくてはならないのです。

——市長は、まさに多様性やさまざまな集団の共生という課題に取り組んでこられました。

**ガルセッティ** ロサンゼルスには三つの特色があります。自由、革新性、そして「ここが自分たちの街だ」という感覚です。

最後の「ふるさと」感覚と多様性について、私は少し大胆なことを主張したいと思います。つまり、ロサンゼルスには、誰にでも居場所があるということです。これは普通にロサンゼルスの街を歩いていけば、皆が感じることです。日系、アルメニア系、メキシコ系の誰でも、ロサンゼルス「ふるさと」だと感じています。彼らの文化、同じ人種

も快適に暮らしています。私たちLAっ子は、境界線をうまく滑走します。文化の境界線も、産業界の境界線も、過去・現在・未来という時間の境界線もです。

今の世界には二種類のリーダーがいて、一つのタイプは境界線を恐れ、もう一つのタイプは境界線の活力を生かすことを考えます。私の見たところ、第二のタイプが明日の世界を掴むための競争に勝利するでしょう。

### 短期的には二国間FTAも有りつべし

——自由貿易に関してはどうのようにお考えですか。

**ガルセッティ** 私は熱狂的な自由貿易推進派です。ロサンゼルスは米国最大の貿易港であり、貿易はこの街の繁栄にとって死活的に重要なのです。国際貿易の減少で最初に傷つくのがロサンゼルスの経済です。いま起きている貿易競争のせいで、貨物の取扱高が二〇％も低下するかもしれないという推計もあります。私にとって貿易問題は他人事ではありません。

ただし、貿易は公正なルールに基づいたものであってほしいし、社会的公正も考慮してほしいと思います。私は新世代の貿易外交の担い手になりたいと思います。貿易をめぐる交渉を、単なる各業界の要望の羅列ではなく（もちろん

の人々、彼らの言葉、彼らの食べ物があるのです。

しかもそれは競争や対立の関係にはありません。つい最近、ジョン・サン・ゴールドというロサンゼルス在住の人物が亡くなりました。彼は「食の評論家」として初めてピューリッツァー賞を受賞する栄誉を受けた人物です。彼はキッチンカーの料理やタコスの屋台、一方で最高級のレストラン、つまりロサンゼルスの食のすべてを論じました。そんなゴールドが亡くなって全ロサンゼルスが悲しみに暮れています。なぜなら、彼がロサンゼルスの最も素晴らしい点を雄弁に語ってくれていたからだと思います。市内にはさまざまな香りがあり、そして混じり合う、それがロサンゼルの強みだと私たちは知っています。

ですから、多様性は新しい課題ではないし、私に言わせれば、そもそも課題ですらないのです。ロサンゼルスが見せる「顔」は今日の世界が見せる「顔」であり、二〇年後、三〇年後、四〇年後には同じことがアメリカ全土でも起ころう、ということなのです。

——お話を伺っていると、市長自身がロサンゼルスの象徴のように思えてきます。

**ガルセッティ** 私自身、ユダヤ系とメキシコ系の血が入っていて、名前はイタリア系。そして、ロサンゼルスでとて

ん各業界の要望は重要ですが）、よりよいものになりたいのです。いま合意できるのではなく、将来を見据えて、どのような利害の一致があるかを考えねばなりません。

たとえば、ロサンゼルスに展開している日本企業は数多くありますが、それでも現状では二四五社にとどまっています。また、ロサンゼルスは米国で最も国際化の進んだ都市ですが、それでもロサンゼルスの企業で海外とやり取りがある企業は全体の１％だけです。この１％を二％に引き上げるだけで、ロサンゼルス経済には大きなプラスですし、相互理解も進みます。私は市場が開放されるべきだと考えていますし、ロサンゼルス企業と他地域の企業とのマッチングにも意欲的です。他都市でこうしたところは、そう多くはないと思います。

また、日米は環太平洋パートナーシップ（TPP）協定が難しくても、二国間の自由貿易協定（FTA）を結ぶべきだと思います。できれば、私が自分の手でやってみたいですね。

——TPPのような多国間協定と二国間FTA、どちらがより望ましいのでしょうか。

**ガルセッティ** 長期的には多角的な貿易合意が形成されるのがベストですが、短期的にはFTAもありえると考えて

います。

率直に言って、現状の貿易に関わる制度では、何十年と変わっていないものもあります。とくに撤廃されてしかるべき関税も残っています。日本の自動車メーカーがピツクアップ・トラックやSUVをアメリカで製造しなくてはならないのも、昔からの関税のせいです。具体的な論点はいろいろとあるのだから、トランプ大統領が貿易問題に強い関心を寄せていること自体は正しいと思っています。

問題は、トランプ大統領が実際の交渉より前に問題を大きくしてしまったことですね。交渉が続き、いよいよ話し合いが進まなくなったときに使うべき伝家の宝刀を、いちばん最初に抜いてしまった。最初にいちばん強硬なことを言ってしまったのは、そこから後退することはできないし、多くの人が苦しむことになります。

私はTPPに反対していましたが、それは合意された文書に欠点があったからです。環境保護のための条項が以前案よりも弱くなっていたし、労働者保護の観点も後退していました。他にもジェネリック医薬品へのアクセス制限の問題があつて、これは世界中の人々の健康よりも製薬会社の利益を優先する内容になっていました。もしも私が交渉の当事者であれば、もっとよい取り決めを作ろうとした

でしょう。しかし、方向性自体は正しいと思います。私は自由貿易を強く信じています。貿易戦争も普通の戦争と同じで、誰も勝利することはありません。勝者は敗者と同じくらい苦しむことになるからです。

## 歴史問題はニュアンスに満ちたアプローチで

——日本との関係で、最近に従軍慰安婦問題の主戦場が米国に移っているように思います。

ガルセツティ 過去について率直になるのが、最も有効な道だと思います。私はよく、トルコとドイツの対比を取り上げます。ドイツはホロコーストの問題を直視して、ユダヤ人ともイスラエルとも良好な関係を築き上げ、今ではヨーロッパ最大の大国です。一方、トルコは百年前のアルメニア人の虐殺を否定し、アメリカのように「ジェノサイド」と見なす他の国々との間に軋轢を生じています。

いずれも過去のことであり、今も生きている人たちの責任の問題ではない。慰安婦の問題は日韓間でいまだに議論となっていることは知っていますが、ニュアンスに満ちたアプローチを工夫して、早く過去の問題として、両国に温かい信頼関係が生まれることを期待します。●

(翻訳・徳川家広)